

子供の食事の楽しさとその影響

池山和子・長田純子

(1992年10月15日 受理)

The Happiness of Child's Meal and it's Influence

Kazuko IKEYAMA and Jyunko NAGATA

I. はじめに

近年“食”についての社会文化的な側面についての議論が高まっている。子供の食事に関しても家族そろっての食事の減少傾向などの社会的な側面の報告や、偏食と性格や両親の養育態度との関係といった精神心理的な側面を含めての研究がなされてきている^{1,2,3,4,5,6}。二木ら¹は、子供の“食”は身体的因子である神経系の生理機序によって生ずる感覚としての空腹感とともに、情緒的精神的因子である種々の経験を経ることによって形成されてゆく欲求としての食欲が関わっているものであり、その全体を発達栄養行動あるいは発達食事行動と名付け、先天的な遺伝因子を発端として後天的に身につけられていく一つの社会文化的な行動としてとらえることが必要であると述べている。例えば近年の子供の食欲不振について不安定な母子関係による情緒不安定や食事の強制などによる不安感の高まりにより食欲中枢が刺激されて食欲不振となっている例が多く、特に食事の強制は子供の食欲のみでなく生活全般の意欲をも削いでしまう結果につながってゆきやすいことを指摘している。実際に幼稚園あるいは小学校でも園や学校での食事に関するなんらかのトラブルから園や学校へ行くことをいやがるのが、本格的な登園拒否や登校拒否に至らなくともけっこう多いと聞かれる。子供にとって生活の中で食事活動が心身ともに満足できるものか否かということは、栄養によって身体を形成するだけでなく生活全般への精神的影響が一般に考えられているよりもあるのではないか。こうした問題意識から、現代の子供の意識の中で食事はどのように感じられているのか、またそうした感情と生活一般への影響がどのようなものかを試行的に探る目的で調査を行った。

II. 方 法

調査対象・時期

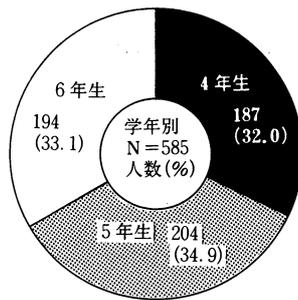
鹿児島市内小学校4年生から6年生の児童とその保護者 680組

児童の回答と保護者の回答がそろっているもの 585組を有効票とした。

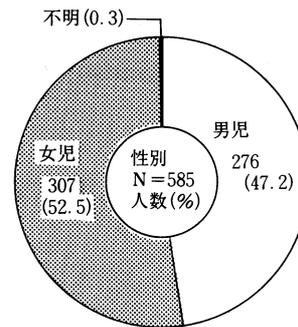
(鹿児島市立学校給食センター給食) 295組 (回収率 80.6%)

(自校給食) 290組 (回収率 92.4%)

対象の性別と学年別の構成を〔図1〕と〔図2〕に示す。



〔図1〕 学年別対象児構成



〔図2〕 男女別対象児構成

調査の時期と方法 平成3年10月中旬～11月上旬

各学校の担任の先生を通じて児童と保護者に学校単位で配布回収した。

調査用紙

児童用の調査用紙の質問内容は、給食に関する項目、家庭での食事に関する項目、本人の性格に関する項目などである。保護者用の調査用紙は食事に関する質問と子供の乳児期に関する質問を設けた。保護者と児童で食べ物に関する好き嫌いとお食べる量について同内容の質問をした。また両調査用紙とも氏名の記入は求めず生年月日等によって保護者とその児童を組み合わせた。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 食事時間の愉快さの全般的傾向

学校での食事は給食、家での食事については現代の日本では夕食を最も主な食事としている家庭が多いことと朝食はとらない子供が増えていることを考えあわせ、夕食について尋ねた。

給食については「とても大好き」「好き」と答えた児童合わせて69.3%、「きれい」と回答している子供は3.9%であり、また、夕食について「とても楽しい」「けっこう楽しい」と回答している児童合わせて71.8%、「あまり楽しくない」「楽しくない」合わせた回答は2.6%となっている。食事の時間は7割以上の子供が、好きまたは楽しいと答えている〔表1〕。

給食のことが気になるために学校へ行きたくないと思った経験がある子供は「しょっちゅうそう思う」「ときどきそう思う」を合わせ給食をきっかけとして学校へ行く気持ちにマイナスの影響を

受けていると思われる子供は5.5%, そのようなことの全くない子供は81.9%である [表2]。二木が述べているように子供の食事は楽しい場面であるのが基本的な姿であることを考えると, この数値はやや高いように思われる。

家での食事について何が一番楽しいかを尋ねた結果を男女別に示したのが [表3] である。5 選択肢から1つを選択するよう求めたが, 全体では「家族がそろい, いろんな話をすること」と回答した子供が53.3%で最も多く, 過半数を越えているが, 「テレビをみながらごはんを食べること」との回答が全体で29.6%であった。女兒の方がより「家族が話をすること」を挙げており, 「おなかがいっぱいになる」「テレビを見ながら食べること」は男児の方に多くこの差は有意である。

[表1] 食事に対する感情 N=585

	とても大好き	好き	どちらでもない	きらい	大嫌い
学校の食事(給食)	166 (28.4)	239 (40.9)	157 (26.8)	16 (2.7)	7 (1.2)
	とても楽しい	けっこう楽しい	ふつう	あまり楽しくない	全然楽しくない
家での食事(夕食) NA=4	233 (39.8)	187 (32.0)	146 (24.9)	8 (1.4)	7 (1.2)

† [表2] 給食のことが気になって学校へ行きたくないと思うこと N=582 NA=3

しょっちゅう 思う	ときどき そう思う	あまりそう 思わない	全然そう 思わない	わからない
5 (0.9%)	27 (4.6%)	48 (8.2%)	479 (81.9%)	23 (3.9%)

[表3] 夕食の楽しさ—何が楽しいか

	家族がそろい 話をすること	おなかがいっ ぱいになる	テレビを見な がら食べる	楽しいこと はない	その他
男児	121 (38.8)	29 (70.7)	96 (55.8)	23 (48.9)	4 (50.0)
女兒	191 (61.2)	12 (29.3)	76 (44.2)	24 (51.1)	4 (50.0)
計	312 (100)	42 (100)	173 (100)	47 (100)	8 (100)

$\chi^2=23.19$ df=4 p<0.01 NA=5 単位: 実数(%)

(2) 学校での食事(給食)について

給食の時間を「とても大好き」「好き」と答えた児童を“給食時間の好きな群”とし、それ以外の「どちらでもない」「きらい」「大きらい」の回答をした者を合わせ“給食時間が好きとはいえない群”として、関連があると思われる項目についてクロス集計を行い差の検定を行った。有意な差のあったものを中心に述べる。

[表4] ~ [表13] にみられるように給食時間の好きな子供は、①よく食べ(食べる量が多く)、

[表4] 給食時間を好き—友達と比べ食べるか(子供自身)

	食べる方	食べない	どちらともいえない
給食時間を好き	261 (64.4)	106 (26.2)	38 (9.4)
好きとは言えない	61 (34.5)	82 (46.3)	34 (19.2)
計	322 (55.3)	188 (32.3)	72 (12.4)
$\chi^2=45.11$ df=2 p<0.01 NA=3 単位:実数(%)			

[表5] 給食時間を好き—食べる量(保護者からみて)

	多い	ふつう	少ない	わからない
給食時間を好き	96 (23.8)	234 (58.1)	72 (17.9)	1 (0.2)
好きとは言えない	26 (14.6)	112 (62.9)	38 (21.3)	2 (1.1)
計	122 (21.0)	346 (59.6)	110 (18.9)	3 (0.5)
$\chi^2=8.10$ df=3 p<0.05 NA=4 単位:実数(%)				

[表6] 給食時間を好き—友達と比べ食べ物の好ききらいは多い方か(子供自身)

	多い	少ない方	少ない	どちらともいえない
給食時間を好き	67 (16.6)	106 (26.2)	202 (50.0)	29 (7.2)
好きとは言えない	66 (37.1)	54 (30.3)	43 (24.2)	15 (8.4)
計	133 (22.9)	160 (27.5)	245 (42.1)	44 (7.6)
$\chi^2=43.32$ df=3 p<0.01 NA=3 単位:実数(%)				

〔表7〕 給食時間を好き—好き嫌いは多い方か(保護者からみて)

	多い	あまりない	全くない	どちらともいえない
給食時間を好き	84 (20.8)	243 (60.1)	63 (15.6)	14 (3.5)
好きとは言えない	66 (37.1)	92 (51.7)	17 (9.6)	3 (1.7)
計	150 (25.8)	335 (57.6)	80 (13.7)	17 (2.9)

$\chi^2=18.88$ df=3 p<0.01 NA=3 単位:実数(%)

〔表8〕 給食時間を好き—食べる速さ

	速い	遅い	どちらともいえない
給食時間を好き	208 (53.2)	115 (29.4)	68 (17.4)
好きとは言えない	49 (28.2)	87 (50.0)	38 (21.8)
計	257 (45.5)	202 (50.0)	106 (18.8)

$\chi^2=32.14$ df=2 p<0.01 NA=20 単位:実数(%)

〔表9〕 給食時間を好き—食べたことのないものを平気で食べられるか

	全く平気	他の人が食べておいしいと言えれば	食べられない	どちらともいえない
給食時間を好き	136 (33.7)	192 (47.5)	31 (7.7)	45 (11.1)
好きとは言えない	23 (12.9)	95 (53.4)	21 (11.8)	39 (21.9)
計	159 (27.3)	164 (28.0)	52 (8.9)	84 (14.4)

$\chi^2=32.68$ df=3 p<0.01 NA=3 単位:実数(%)

〔表10〕 給食時間を好き—食物アレルギー

	ある	ない
給食時間を好き	49 (12.2)	354 (87.7)
好きとは言えない	10 (5.7)	166 (94.3)

$\chi^2=5.62$ df=1 p<0.05 単位:実数(%)

〔表11〕 給食時間を好き—給食に大嫌いなものがでるか

	でる	でない	きらいなものはない
給食時間を好き	121 (30.0)	226 (56.1)	56 (13.9)
好きとは言えない	113 (62.8)	56 (31.1)	11 (6.1)
計	234 (40.1)	282 (48.4)	67 (11.5)

$\chi^2=55.85$ df=2 p<0.01 NA=2 単位：実数(%)

〔表12〕 給食時間を好き—給食が残っているのに昼休みになること

	しょっちゅう	時々	殆どない	全然ない
給食時間を好き	23 (5.7)	101 (24.9)	143 (35.3)	138 (34.1)
好きとは言えない	38 (21.1)	63 (35.0)	52 (28.9)	27 (15.0)
計	61 (10.4)	164 (28.0)	195 (33.3)	165 (28.2)

$\chi^2=50.58$ df=3 p<0.01 単位：実数(%)

〔表13〕 給食時間を好き—給食を残すか

	残す	残さない
給食時間を好き	123 (30.4)	281 (69.6)
好きとは言えない	115 (63.9)	65 (36.1)
計	238 (40.8)	346 (59.2)

$\chi^2=57.68$ df=1 p<0.01 NA=1 単位：実数(%)

②好き嫌いが少なく、③食べる速さが速く、④今まで食べたことのないものを平気で食べられ、⑤食物のアレルギーがなく、従って給食に大嫌いでもどうしても食べられないようなものがでることが少ないと感じており、また、給食を食べ終わらないうちに昼休み時間になることが少なく、従って給食を残すことも少ない子供たちで、そうでない子供に比べ有意に多い。上記の9つの傾向は性差をみると男児が女児より有意に高く、結果的に男児の方が女児より給食時間が好きな子供が多い〔表14〕。学校によっても差がみられる〔表16〕が、給食方式は、3校のうちB校とC校が自校給食で

〔表14〕 給食時間を好き—性別

	男児	女児	計
給食時間を好き	214 (53.1)	189 (46.9)	405 (100)
好きとは言えない	62 (34.4)	118 (65.6)	180 (100)
計	276 (47.3)	307 (52.7)	585 (100)

 $\chi^2=17.37$ df=1 p<0.01

単位:実数(%)

〔表15〕 給食時間を好き—大嫌いなものが出た時どうするか

	一口も食べない	一口食べる	半分くらい	少し残す	全部食べる
給食時間を好き	13 (4.7)	19 (6.8)	42 (15.1)	55 (19.8)	149 (53.6)
好きとは言えない	13 (8.1)	25 (15.6)	34 (21.3)	31 (19.4)	57 (35.6)
計	26 (5.9)	44 (10.0)	76 (17.4)	86 (19.6)	206 (47.0)

 $\chi^2=19.04$ df=4 p<0.01

NA=3

単位:実数(%)

〔表16〕 給食時間を好き—学校別

	A小学校	B小学校	C小学校
給食時間を好き	196 (48.4)	157 (38.8)	52 (12.8)
好きとは言えない	99 (55.0)	36 (20.0)	45 (25.0)
計	295 (50.4)	193 (33.0)	97 (25.0)

 $\chi^2=25.49$ df=2 p<0.01

NA=20

単位:実数(%)

あり, 給食方式の差とは考えられない。給食方式によって有意差のみられた項目は, 「給食に大嫌いなものが出るか」(5%水準), 「給食が残っているのに昼休みになることがあるか」(1%水準), 「給食を残すか」(1%水準)の3項目で, いずれも自校給食の方が少ない傾向であった。学校別に差のある項目を調べてみると「担任の先生の給食を残すことについての注意」が1%水準で有意な差があり, C校では他校に比べ, 「嫌いなものも半分くらい食べたなら残すことを許してくれる」「気分が悪いときは残してもよい」が高く, 「注意はするが残してもかまわない」「何も言わないので自

由に残してもよい」が低い傾向がみられた。「給食を残すことを厳しく注意する担任に受け持たれたことがあるか否か」の項目も給食時間が好きかそうでないかと差が見られる(5%水準)が、この項目は3校で差がみられなかった。また学校で楽しい時間が多いかどうかについて、「国語、算数、理科、社会、図工、音楽、体育、家庭、道徳、学活、朝授業が始まる前、給食、昼休み、掃除、クラブ、放課後、その他」の17の時間を挙げ、楽しい時間に○をつけてもらい、その数が1から4までの者を楽しい時間が「少ない」、5以上に○をつけた子供を楽しい時間が「多い」として、

〔表17〕給食方式—給食に大嫌いな物がでるか

	でる	でない	嫌いな物ない
センター方式	134 (45.4)	129 (43.7)	32 (10.8)
自校方式	100 (34.7)	153 (53.1)	35 (12.2)
計	234 (40.1)	282 (48.4)	67 (11.5)

$\chi^2=7.03$ df=2 p<0.05 NA=2 単位:実数(%)

〔表18〕給食方式—給食が残っているのに昼休みになること

	しょっちゅう	時々	殆どない	全くない
センター方式	38 (12.9)	96 (32.5)	81 (27.5)	80 (27.1)
自校方式	23 (7.9)	68 (23.4)	114 (39.3)	85 (29.3)
計	61 (10.4)	164 (28.0)	195 (33.3)	165 (28.2)

$\chi^2=14.16$ df=3 p<0.01 単位:実数(%)

〔表19〕給食方式の差—給食を残すか

	残す	残さない
センター方式	171 (58.0)	124 (42.0)
自校方式	67 (23.2)	222 (76.8)
計	238 (40.8)	346 (59.2)

$\chi^2=73.15$ df=1 p<0.01 NA=1 単位:実数(%)

給食時間が好きかそうでないかの差を調べたがこの項目は1%水準で有意であった〔表21〕。楽しい時間が多いか少ないかについては、男児の方が女児より5%の水準で有意に高かったが、学校による有意差はみられなかった。

〔表20〕 給食時間を好き—給食を残すことを厳しく注意する担任に受け持たれたこと

	ある	ない
給食時間を好き	104 (26.1)	295 (73.9)
好きとは言えない	61 (34.7)	115 (65.3)
計	165 (28.7)	410 (71.3)

$\chi^2=4.41$ df=1 $P<0.05$ NA=10 単位:実数(%)

〔表21〕 給食時間を好き—学校で楽しい時間が多いか (注)

	少ない	多い
給食時間を好き	107 (26.4)	298 (73.6)
好きとは言えない	75 (41.9)	104 (58.1)
計	182 (31.2)	402 (68.8)

$\chi^2=13.87$ df=1 $P<0.01$ NA=1 単位:実数(%)

(注) 学校の時間割—学活, 道徳を含めて10教科と給食昼休み, 掃除, クラブ, 放課後, その他の17の時間について楽しい時間に○をつけその数が5未満の者を「少ない」, 5以上の者を「多い」とした

(3) 家庭での食事(夕食)について

家庭での夕食についても、「とても楽しい」「けっこう楽しい」を選んでいる児童を“夕食の楽しい群”とし、それ以外の「ふつう」「あまり楽しくない」「ぜんぜん楽しくない」との回答者を“夕食が楽しいとは言えない群”として同じく関連のあると思われる項目についてクロス集計し差の検定を行った。有意な差がみられたものは「家での食事の時一番楽しいことは何か」〔表22〕, 「家の人は好ききらいして食べない時にどうするか」〔表23〕, 「食べたことのないものを平気で食べられるか」〔表24〕, 「食べる速さ」〔表25〕, 「学校で楽しい時間が多いか」〔表26〕であり、家庭での夕食が子供にとって“楽しい群”と“楽しいと言えない群”に関しては、性別、食物アレルギーの有無、食事の量の多少、好ききらいの多少の項目については差がみられなかった。家庭で食事の好ききらいに関して、夕食を“楽しいと言えない群”の方が「一口も食べなくても許してくれる」の回答が、“楽しい群”よりいくらか多い。

〔表22〕 夕食の楽しさ—何が楽しいか

	家族がそろい話をすること	おなかがいっぱいになる	テレビを見ながら食べる	楽しいことはない	その他	計
夕食が楽しい	277 (66.0)	29 (6.9)	94 (22.4)	14 (3.3)	6 (1.4)	420 (100)
楽しいとは言えない	35 (21.7)	13 (8.1)	78 (48.4)	33 (20.5)	2 (1.2)	161 (100)
計	312 (53.6)	42 (7.2)	173 (29.7)	47 (8.1)	8 (1.4)	584 (100)

$\chi^2=111.71$ df=4 $P<0.01$ NA=4

単位:実数(%)

〔表23〕 夕食の楽しさ—好き嫌いして食べない時家の人はどうするか

	全く強制は しない	半分食べる ように強制	一口食べる ように強制	全部食べる よう強制	きらいな料理 は出さない	大嫌いな食 物はない
夕食が楽しい	30 (7.3)	174 (42.1)	46 (11.1)	61 (14.8)	17 (4.1)	85 (20.6)
楽しいとは言えない	29 (18.5)	63 (40.1)	13 (8.3)	25 (15.9)	8 (5.0)	19 (12.1)
計	59 (10.3)	237 (41.4)	59 (10.3)	86 (15.2)	25 (4.3)	104 (18.4)

$\chi^2=19.64$ df=5 p<0.01 NA=4 単位：実数(%)

〔表24〕 夕食の楽しさ—食べたことのないものを平気で食べられるか

	全く 平気	他の人が食べて おいしいと言え ば	食べられない	どちらとも 言えない
夕食が楽しい	126 (30.2)	204 (48.9)	32 (7.7)	55 (13.2)
楽しいとは言えない	32 (19.9)	81 (50.3)	19 (11.8)	29 (18.0)
計	158 (27.3)	285 (49.2)	51 (8.9)	84 (14.4)

$\chi^2=8.69$ df=3 p<0.05 NA=4 単位：実数(%)

〔表25〕 夕食の楽しさ—食べる速さ

	速い	遅い	どちらとも いえ
夕食が楽しい	197 (48.3)	143 (35.0)	68 (16.7)
楽しいとは言えない	58 (37.9)	57 (37.3)	38 (24.8)
計	255 (45.4)	200 (35.7)	106 (18.8)

$\chi^2=6.72$ df=2 p<0.05 NA=24 単位：実数(%)

〔表26〕 夕食の楽しさ—学校で楽しい時間が多いか (注)

	少ない	多い
夕食が楽しい	121 (28.9)	298 (71.1)
楽しいとは言えない	60 (37.3)	101 (62.7)
計	182 (31.2)	401 (68.8)

(注) 学校の時間割—学活、道徳を含めて10教科と給食、昼休み、掃除、クラブ、放課後、その他の17の時間について楽しい時間に○をつけその数が5未満の者を「少ない」、5以上の者を「多い」とした。

$\chi^2=3.81$ df=1 p<0.05 NA=4 単位：実数(%)

(4) 食事の愉快さと生活

近年家庭での食事の外食化の傾向が報告されているが、それでも家庭の食事は自然にそれぞれの家庭で家族の成員に合わせて用意される。今回の調査で、給食についても夕食についても「どうしても食べられない大嫌いなものが出るか」を子供に尋ねたがその結果としては子供の意識の中でのきれいな物が用意される頻度には給食と夕食で殆ど差がみられなかった。しかし給食は家庭での食事に比べるとはるかに一律に用意されるものである。多かれ少なかれ家族に対して個人的に用意される家庭での夕食に比べ、給食時間が好きか嫌いかにについては、食べ物好き嫌いの多さや食べる量との関連が明瞭に現れたものと思われる。夕食では「家族がそろい話をする事」が楽しさの要因として第1に挙がり、食事の社会的な側面を、子供(特に女兒)が強く感じている様子がみられる。給食については社会的な要因に関する質問を設け落とされたため、この点を今回の調査ではっきりさせることができなかった。

「学校で楽しい時間が多いか少ないか」についてはその基準をもう少し検討する必要があるが、5%水準であるが、給食・夕食ともに、好きな、あるいは楽しいとはっきり答えた子供の方が楽しい時間が多い子供である。これらの項目はいずれも生活全般が順調に運んでいることの一つの現れと考えることができる。特に子供の場合、食事の感情的側面が損なわれることはその他の生活の全般的な雰囲気に影響することは容易に想像される。ただし今回の調査でも単に好き嫌いを表面的に容認するか否かと食事に関する感情を損なうこととは別であるのではないかと考えられる結果もみられた〔表23〕。今回の結果からでこれ以上考えることができないが、子供に対する熱意の感じられない大人の態度の場合は食べ物の好き嫌いが咎められなくても子供にとって快い経験にはならないことを意味する表れとして解釈することも可能である。

(5) 給食のことが気になって学校へ行きたくないと思う場合

給食のことが気になって学校へ行きたくないと思ったことが「しょっちゅうある」「時々そう思う」合わせて5.5%32名と、「あまりそう思わない」「全然思わない」合わせて91.9%527名の2群について目的変数とし、調査項目のいくつかを説明変数として数量化理論Ⅱ類で分析した。〔表27〕はその結果である。性別については説明変数に加えて計算しても、レンジの順位が非常に低い結果であったので表に示した場合は学年、性別とも説明変数から除いた。レンジ、偏相関係数とも第1位は食べたことのない食べ物を平気で食べられるかどうかの項目であった。2位以下はレンジの場合、2位・夕食が楽しいかどうか、3位・保護者のみた子供の好き嫌いの程度、4位・子供からみた母親の好き嫌いの程度であり、偏相関係数の場合、2位・子供からみた母親の好き嫌いの程度、3位・子供自身のみた自分の好き嫌いの程度、4位・家庭で好き嫌いをして残した時の母親の対応である。給食のことが気になって学校へ行きたくないと思う傾向は、「食べたことのないものは他の人が食べておいしいと言っても食べられない」「家庭での夕食が楽しくない」「好き嫌いが多い」と感じている子供に大きいと思われる。

〔表27〕給食が気になって学校へ行きたくないと思うことがあるか—数量化Ⅱ類による

項目	カテゴリー	n	スコア	レンジ	偏相関係数
担任の指導					
担任の指導	全部食べるように	20	0.0117	0.0632	0.1111⑤
	半分食べるように	117	-0.0263		
	一口食べるように	27	-0.0301		
	体調によって加減	158	0.0169		
	給食を残すと罰	11	-0.0242		
	注意はするのみ	77	0.0331		
	何も言わない	38	-0.0156		
	その他	44	-0.0160		
給食指導の厳しい担任 に受け持たれたこと	ある ない	139 353	0.0240 -0.0095	0.0335	0.0729
学校	A小学校 B小学校 C小学校	245 166 81	-0.0060 0.0010 0.0161	0.0221	0.0365
食べ物の好き嫌い・量・食べ方の速さ・広がり					
子供自身のみた 自分の好き嫌いの 程度	多い あまりない 全くない どちらともいえない	110 140 206 36	0.0447 -0.0253 -0.0092 0.0142	0.0700	0.1166③
保護者のみた 子供の好き嫌いの 程度	多い 少ない方 少ない どちらともいえない	124 286 68 14	0.0157 -0.0084 -0.0160 0.1106	0.1266③	0.1039
子供自身のみた 自分の食事量	よく食べる 食べない どちらともいえない	270 161 61	0.0033 0.0012 -0.0178	0.0044	0.0312
保護者のみた 子供の食事量	多い ふつう 少ない わからない	99 298 93 2	-0.0140 -0.0034 0.0270 -0.0551	0.0821	0.0666
子供自身のみた 自分の食事の速度	速い 遅い どちらともいえない	229 172 91	0.0054 -0.0024 -0.0089	0.0143	0.0246
食べたことのない ものを食べること	全く平気 人が食べておいしい といえばたべられる 食べられない どちらともいえない	138 239 46 69	0.0419 -0.0349 0.1284 -0.0484	0.1768①	0.2525①
給食の様子					
食べ終えないのに 昼休み時間に なってしまうこと	しょっちゅう ときどき 殆どない 全くない	50 143 166 133	0.0025 0.0017 0.0155 -0.0221	0.0376	0.0703
給食を残すこと	よくある 殆どない	198 294	0.0275 -0.0185	0.0460	0.0908
給食に大嫌いな 物が出ること	でる でない 嫌いな物無い	197 243 52	0.0267 -0.0124 -0.0432	0.0700	0.0987
学校で楽しい 時間が多いか	多い 少ない	154 338	0.0022 -0.0010	0.0032	0.0071

家での様子					
家庭での夕食は楽しいか	楽しい	363	0.0044	0.1268②	0.0929
	ふつう	118	-0.0233		
	楽しくない	11	0.1036		
好き嫌いへの保護者の指導	特にない	49	0.0560	0.0756	0.1143④
	半分食べるように	206	-0.0196		
	一口食べるように	52	-0.0094		
	全部食べるように	73	0.0003		
	夕食に出さない	20	0.0419		
	好き嫌いはない	92	0.0101		
子供の個性					
友達をつくる時	自分から	318	0.0033	0.0426	0.0584
	人から	47	0.0252		
	どちらともいえない	127	-0.0175		
知らない道を通ってみる	ある	184	0.0112	0.0289	0.0514
	ない	297	-0.0052		
	わからない	11	-0.0472		
ふとんが変わると眠れない	そう	100	0.0166	0.0289	0.0461
	そうでない	378	-0.0053		
	わからない	14	0.0236		
母親の食べ物の好き嫌い	きらい				
子供からみた	多い	27	0.0952	0.1123④	0.1249②
母親の食べ物の好き嫌いの程度	あまりない	135	0.0101		
	全くない	299	-0.0171		
	わからない	31	0.0384		
母親自身のみた自分の好き嫌い	多い	38	-0.0349	0.0883⑤	0.0822
	あまりない	197	-0.0116		
	全くない	237	0.0107		
	わからない	20	0.0534		
相関比 (η^2)		0.4637			
判別の中率		86.2%			
				○囲み数字: 順位	

IV. 結 論

二木は、特に子供の食事について、栄養面に注目するだけでなく社会的精神的要因を含めたひとつの学習される行動として捉えることが必要であることを述べ、食事の強制が生活全般の意欲とも関わって悪影響をもたらすことを指摘している。一方家庭の機能のうち“衣”に続いて“食”も外食化の傾向がみられることも様々な形で報告されている。そこで現代の子供の食事について子供の意識の中で楽しく好ましいものであるかどうか、またそのことが生活全体とどのように関連をもっているかを調べるために小学校3・4・5年生とその保護者に質問紙調査を実施した。その結果以下のような事項が得られた。

- 70%の子供が給食、家庭での夕食ともに「好き」「楽しい」と答えている。「きらい」「大きらい」あるいは「あまり楽しくない」「全然楽しくない」と回答した子供は、給食について4%、夕食については3%であった。
- 給食のことが気になって学校へ行きたくないと思うことがある子供は5.5%、全くそう思うことがない子供は82%であった。

- 家庭での食事の楽しさの中身については、子供全体としては「家族そろっていろいろな話をする事」を挙げた子供が50%を越えて最も多く、次が「テレビをみながらごはんを食べる」で30%であった。この傾向は女兒でより強く、男児との差は有意であった。
- 給食を好きと答えている子供は、よく食べ、好き嫌いが少なく、食べる速さが速く、初めて食べるものでも平気で食べることができ、アレルギーのない子供に、そうでない子供に対し有意に多い。よく食べ、好き嫌いが少なく、食べる速さが速く、初めて食べるものでも平気で食べられる子供は男児が女兒より有意に多く、結果的に給食が好きかどうかについても性差がみられる。
- 夕食を楽しいと答えた子供は、よく食べ、初めて食べるものでも平気に食べられる子供で、そうでない子供より有意に多いが、男児と女兒では夕食を楽しさと感じているかどうかについて有意差がみられなかった。夕食を楽しいと答えた子供は答えなかった子供よりも、家庭での食事の楽しさについて「家族そろっていろいろな話をする事」を一番に挙げる子供が多く、他方「テレビをみながらごはんを食べる」を一番に挙げる子供は少なく、この差は有意であった。全体に給食の場合と比べ有意な傾向のある項目が少なく、家庭では食事が家族の成員に合わせて用意されていることが感じられる。
- 給食のことが気になって学校へ行きたくないと思う傾向があると思われるのは、初めての食べ物は他の人が食べておいしいと言っても食べられない、好き嫌いが多く、家庭での夕食が楽しくないと感じている場合である。

また、家庭が好きな子供も夕食が楽しいと答えている子供も、そうでない子供よりも、学校で楽しい時間の多い子供が有意に多かった。これのみではっきりしたことは言えないが、特に子供では、食事の楽しさは今まで考えられていた以上に生活の他の面にも密接な関連をもっていることが考えられる。強制することによって食事そのものを不快なものとして子供に学習させてしまうことは、二木の述べているように生活全般の意欲を損なう影響があることが考えられる。また野西ら²は、偏食を食の範囲の広がりにくさと捉え、その背景を探ると離乳期前の乳児期に既に存在している子供の個性まで遡ることができると述べている。これは現在食べ物に好き嫌いが多かったり食がすすまなかったりすることは“我が儘”と決めつけることで解決できない問題であることを意味している。子供に直接関わる立場では、食事行動を子供が身につけてゆく過程において、子供が自分で食の範囲を広げていけるような対応の仕方を考えることが今後の課題である。

謝 辞

調査にご協力下さいました3校の児童とその保護者の方々、また先生方に深く感謝いたします。

参 考 文 献

1. 二木 武他 小児の発達栄養行動 医歯薬出版KK 1984
2. 野西恵三他 食行動の独自性に関する研究 宮崎大学教育学部紀要 57 (1985) 105-118
3. 渋谷信治他 一般学童の食事習慣としつけ 小児の精神と神経 25 No.3 (1960) 66-70
4. 藤嶋輝子他 高校生の食生活と心的適応 共立女子大学家政学部紀要 37 (1991) 73-79
5. 藤江 奏他 性格特性と両親の養育態度が児童の食物嗜好に及ぼす影響について 家政学雑誌 30 4 (1979) 69-74
6. 猪野郁子他 食物の嗜好傾向と性格に関する研究(V) 島根大学教育学部紀要 10 (1976) 21-28
7. 中山郁子他 食物の嗜好傾向と性格に関する研究(I) 島根大学教育学部紀要 4 (1970) 51-67